

376

結核検診で発見された肺癌症例の検討

長崎県総合保健センター¹、長崎大学第二内科²

○早田 宏^{1,2}、須山尚史^{1,2}、木下明敏²、
谷口哲夫²、力竹輝彦²、松本好幸²、
鶴川陽一²、富田弘志^{1,2}、河野 茂^{1,2}、
神田哲郎²、広田正毅²、原 耕平²

昭和60年度から62年度までの検診例について検討した。合計すると、胸部間接撮影数は581,666名、要精検者数は27,287名で要精検率4.7%、精検受診者数は22,597名で精検受診率は82.8%であった。発見された肺癌は183例(10万対31.5)で、組織型は腺癌111例、扁平上皮癌44例、小細胞癌14例、大細胞癌8例、粘表皮癌2例、不明4例であった。男性は128例中64例が腺癌、41例が扁平上皮癌で、女性は55例中47例が腺癌であった。年齢分布は60歳台に66例、70歳台に75例と多かった。臨床病期はI期87例、II期16例、III期38例、IV期32例で、III・IV期で発見される例がまだ多かった。手術施行は103例(56.3%)であった。昭和61年度の検診発見肺癌についてRetrospectiveにみると、前年度に陰影が認められたのは経年受診31例中20例で、既存構造との重なり、陰影が小さい、陳旧性肺結核と判断されたなどで見逃されていたものが多かった。長崎県でも昭和63年度より老人保健法にもとづく肺癌検診が開始され、当センターでも効率的な集検体制の確立に努力している。

378 宮城県における肺癌検診5年間の発見成績

東北大学抗酸菌病研究所外科¹、岩手県立中央病院呼吸器外科²、南東北病院³、宮城県立瀬峰病院⁴、宮城県立成人病センター⁵、結核予防会⁶

○高橋里美¹、薄田勝男¹、菅間敬治、佐川元保
佐藤雅美¹、太田伸一郎¹、永元則義¹、今井 督¹
斎藤泰紀¹、須田秀一¹、仲田 祐¹、橋本邦久²、佐藤博俊³、
大久田和弘⁴、佐藤正弘⁵、伊藤勝己⁶

昭和57年度、15町村より開始された宮城県の肺癌検診は、昭和61年度は52市町村245,530名に対して施行された。5年間の延べ受診者数は829,079名で、そのうち45,863名に喀痰細胞診を施行した。発見肺癌総数は309例(受診者10万対37)で、男性238例(77%)、女性71例(23%)であった。発見方法別にみると、X線のみによる発見は198例、喀痰のみによる発見は90例、両者による発見は21例であった。これを組織型別にみると、扁平上皮癌172例、腺癌107例、大細胞癌17例、小細胞癌9例、その他4例と扁平上皮癌が過半数を占めた。309例中219例(71%)を切除した。219例中81例(40%)は早期で、そのうち60例は喀痰のみによる発見例であった。また切除219例の術後病期分類は、0期7例、I期156例、II期10例、III A期40例、III B期2例、IV期4例であった。

377 医師会による肺癌検診(第二報)

尼崎市医師会¹、尼崎市立北保健所園田支所²、
兵庫県立成人病センター³、兵庫県立尼崎病院⁴、
兵庫県立塚口病院⁵、関西労災病院⁶

○中牟田健¹、榎林親教¹、浅井信明¹、勝谷積治¹、山口吉彦¹
西村亮一¹、瀬尾 摂¹、金田治也²、高田佳木³、野村繁雄⁴
中川正清⁵、西田道弘⁵、東原恵郎⁶

第一報では開業医による肺癌検診(以下個別検診)と保健所による集団検診とを対比し、個別検診の検診効率が集団検診のそれに比して高いことを示した。

今回は個別検診の有用性を検討する目的で、個別検診により発見された肺癌患者(以下検診群)と、診療によって発見された肺癌患者(以下診療群)とを対比した。

対象ならびに方法;第一報に準じて、検診群は検診医療機関より提出されたフィルムを読影する医師会読影委員会にて『肺癌疑い』とされ、市内三公立病院にて精査の上、肺癌とされた者、診療群は開業医により肺癌を疑われ、精査の上肺癌とされた者をそれぞれ対象とした。

結果;62年度の検診受診者は2654名で、そのうち肺癌と確認された者は13名で、人口10万対比は489.8であり、61年度より高かった。

一方、診療群は47名で、検診群の3.6倍であった。

考察;開業医による個別検診の検診効率が集団検診のそれに比して高いとはいえ、診療群が検診群に比して著しく多いことは、検診受診率および検診効率の尚一層の向上に勤めなければならないことを示唆している。

379 地方小都市における肺癌集団検診

市立輪島病院外科¹、金沢大学放射線科²、同第一外科³
○生垣 茂¹、高島 力²、上村良一²、渡辺洋宇³

輪島市(人口3万2千)では、昭和58年より肺癌検診を実施しているが、この間、輪島市民の肺癌による死亡数は年々増加し、昭和62年には胃癌を抜いて肺癌が癌死亡原因の第1位になった。58年以来、輪島市民で肺癌に罹患した数は75例であり、手術を施行出来たのは40%に当たる21例で、大多数は3年以内に死亡している。

集検では、これら全罹患者の3分の1(25例)を発見している。最近2年間では、I期肺癌の発見率、根治切除率共に58%、経年受診率も80%を越え、「検診手びき」による目標を上回る精度管理を維持している。

しかし、狭い地域内での集検でその成績と効果が並行し得ない事は、検診の施行上少なからぬ障害となる。

輪島市では、経年的集検で発見時すでに早期でなかった症例及び集検と集検との間に外来受診で発見された症例(厚生省池田班の精度管理症例)は、全罹疾患の26%に当たる20例に及んでいる。これらの20例中前回の検診時フィルムに認められる陰影の見落としは5例にすぎず大多数は診断困難例といえるものであった。20例中小細胞癌は4例で、腺癌が8例と多く、扁平上皮癌3例、大細胞癌2例であった。20例中手術が施行出来たのは5例のみで、14例が発症後1年以内に死亡した。発症の極めて早い肺癌であったといえる。length biasは我々の検診で大きな位置を占めている。これを乗り越えて集検を有効ならしめるには、更に一層の精度管理に努めねばならない。